第3章　新制墨谷二中

部員からキャプテンとして不適格の烙印を押された丸井は、ナインからのキャプテン再任の話を二つ返事で受けたわけではなかった。

3・1　野球部のうわさ

生徒A「なんだい、野球部のやつらあんなに小さくなっちゃってよ。」
生徒B「そりゃそうよ、昨年の優勝校がたった一戦でやぶれちまったんだからな。しかも、うちをやぶった港南が第二戦で初出場校にコロッとやられちまったんじゃあな…！」
生徒A「そうか、そりゃ昨年の優勝校にしたらバツがわるいよな。」
生徒B「そのうえ、キャプテンの丸井がおりるのおりないのってゴタゴタしてるらしいぜ。」
生徒A「ここんとこ、野球部もついてねえな。」

3・2　丸井の条件

ナインが続々と部室に集まってきた。今日は丸井がキャプテン再任の条件をナインに提示すると約束した日でもあった。

島田「よう。」
加藤「よう…。」
島田「ところで、丸井さんキャプテンを続けてくれることになったのか？」
加藤「それが、引き受けるからには条件があるっていうんだ。で…今日、その条件を持ってくるんだとさ！」
島田「なんだろうね、条件て？」
加藤「あの人のこったから立場上のことじゃねえか。」

それぞれがいろいろな思いで丸井のキャプテン再任の条件を推測していた。そこに丸井が部室に入ってきた。

島田「こ、こんにちはキャプテン！」
丸井「キャプテン、キャプテンってきやすくよぶねえ！　まだ誰もキャプテンを引き受けるとは言ってねえだろ。まあつったってねえでかけろよ！」

主だったナインが部室に集合し丸井の話を聞いた。

丸井「みんな、そろってるな！」
島田「は…はいっ。」
丸井「このたび、このおれにふたたびキャプテンの座にすわってほしいという諸君の気持ちはようくわかった。そしてキャプテンにはこのおれがふさわしいと思う諸君の気持ちもようくわかった。しかしキャプテンとしてそのおれがいったい何をしてあげられたのだろうか。選抜大会第一戦でみじめにも敗北を味わわせたのが現実じゃないか！　さて、そこでふたたび諸君のキャプテンになってくれとの熱心な推薦を受けたしだいだが……、そんな諸君に何か

してあげられるだろうかと日夜トコトン考えてみた。そしてどんなチームにも通用するチーム……、いや真の日本一にきずきあげることが、このおれに与えられた使命だということに気づいた！　しかし、そのようなことが実際に可能であるかどうかいろいろ検討してみたのだが…」

久保「あのう、結局はやってもらえるんですか？」

丸井「話は最後まできくもんだ。このーっ。えーと…、今どこまでしゃべったっけ？」

久保「あのう、可能かどうかっていうところです。」

丸井「…で、可能にするためには練習しかない。それも想像を絶するような練習の積みかさねしかないという結論にたっした。その成果をためすのがおれが決めた三十六校との練習試合である。その三十六校との試合に全勝できるか否かによって真の日本一になれるかなれないかが決まるといっても過言ではなーい！　どうだ、諸君。三十六校をたたきつぶして真の日本一になってやろうではないか！」

あまりにもナインの反応がないことに丸井は疑心暗示に陥った。

丸井「お…おれの言ってることおかしいか？」

イガラシ「夢を大きくもつってことは大変けっこうだ相手に一日三校も対戦しなくちゃならな」

加藤「そうだよな。」

島田「練習試合まで二十日ちょっとしかないっ」

丸井「ま、ま、ま。おれもはじめは不可能だと可能にする合宿プランを作ってみた。」

丸井「このプランについてくるならキャプテンを引き受けよう。これがおれの条件だ。」

加藤「ま…丸井さんにお願いしようじゃないか。」

島田「そうだな、どんなにくるしくったってみんないっしょだもんな。」

「お願いします。」

合宿スケジュール
6時　起床
7時　朝食
8時　ランニング　柔軟体操
10時　守備練習
12時　昼食
1時　バッティング練習
3時　おやつ　お昼寝
5時　ランニング　柔軟体操
7時　夕食
8時　ミーティング
9時　自由
11時　消燈

丸井「そ、そうかおれについてきてくれるのだな。ありがとう、ありがとう。おれも男だ！　ひきうけたからには野球部に命をあずけ、骨をうめるかくごでやるぞーっ。じゃあさっそく明日から合宿にはいるので一年生に知らせてきてくれ。」

高木「あ、明日って場所はどうするんですか？」

丸井「講堂でたくさんだ。」

高木「でも許可をとらないと…。」

丸井「昨日とっておいたよ。」

高木「わ、わかりました。」

高木「なんだ、はじめっからキャプテンをひきうけるつもりだったのか、まったくぎょうぎょうしい人だ。」

3・3　日本一への決意

めいめいが合宿場所の講堂に集まってきた。誰もが合同合宿ということでうれしさを隠しきれずにいたが、イガラシだけが講堂の壁によりかかって一人考え込んでいた。

丸井「どうしたんだイガラシ、いやにしんこくな顔しちゃってよ。」

イガラシ「あ、キャプテン。」

丸井「なんか不満でもあるのかよ。」

イガラシ「いえ、べつに…。」

丸井「うそつけ、おまえがそんな顔したあとはかならずイチャモンつけるくせに。」
イガラシ「ははは、キャプテンにあっちゃかなわないな。」
丸井「で、なんだよその不満てのは。」
イガラシ「じつはスケジュールのことなんです。」
丸井「……。ス、スケジュールのどこがきにいらねえってんだよ。」
イガラシ「いえ…、おれはキャプテンのいうどんなタイプの相手にも通用する、真の日本一のチームになろうという意気ごみはよくわかるんだけど…。」
丸井「じゃあ文句ねえじゃんか、このスケジュールでバッチリみんなをきたえてだな…。」
イガラシ「バッチリね…。」
丸井「はっきりいえよ、おまえはこのスケジュールじゃ日本一になるのはむりだっていいたいのか。」
イガラシ「はっきりいやあそうです。」

イガラシに合宿スケジュールを否定されたことで丸井はイガラシに背を向けて立ち去ろうとした。

丸井「しかし…、イガラシにいわれるとなんか気になるなあ。」

丸井は立ち止まってふり向いた。

丸井「じゃ、おまえはこれをどうすりゃいいってんだ。」
イガラシ「どうって…方法は簡単です。練習時間を三倍にすりゃあいいんです。」
丸井「サ、三倍…。」

キャプテン丸井とイガラシの話にまわりの生徒達もようやく気づき始めた。

丸井「おまえ、いくらなんたって三倍…。」
イガラシ「さっき、キャプテンはみんなの前で三十六校に全勝すると約束しましたね。真夏という最悪のコンディションで、しかも一日三試合もやることになるんだから、それにたえられる練習をつんでおかなければ全勝どころか、試合にすらなりませんよ。しかもその中には選抜チームはもとより、準決勝まですすんだもうれつなチームがズラリとまちかまえているんですよ。本当に全勝する自信があるんですか？」
丸井「い…いや、なにも三十六校全部に勝てるとは…。意気ごみはあるんだけどさ…。おれ…、やっぱことわってこようかな…。」
イガラシ「ちょっとまってよ。キャプテンの意気ごみはでかすぎると思う。しかし人間やってやれないことはない。このさい一発、日本一にかけてみたらどうです。三倍にしてね。」

イガラシは丸井が作ったスケジュール表の上から新しいスケジュールを書いていった。起床時間は四時半、六時からランニング、柔軟体操、三時からのおやつ、お昼寝の時間をカットしてトレーニングの時間にし、夜九時から十一時までトレーニングを追加した。八時からだったミーティングは夜十一時からになり、消灯は午前一時になっていた。

丸井「……。でもなあ…、そんなきついスケジュールでやったらほとんどの部員がついてこられないぞ。」
イガラシ「まあ、むりでしょうね。」
丸井「……。だいたいおまえはチームワークのことなんかどうでもいいと思ってんだから。」
イガラシ「しかし、大きく前進させようとするならそれなりの犠牲を覚悟しなくちゃできませんよ。」
丸井「うーん。しかしなあ…。日本一、三倍……か。」

遊び回っていた部員達もいつしか全員集まってきて、丸井の背中越しからイガラシと丸井の会話を聞いていた。

丸井「ようし一発かけてみるか。イガラシ全員を集合させろ！」
イガラシ「もうみんな集まってますよ。」

イガラシが指さす方向には野球部員全員が集まっていた。

3・4　合宿開始

野球部一年生が野球部部室前で泣きながら立っていた。

陸上部A「かわいそうによ、よっぽどつらいんだろうな。」
陸上部B「おれやつらの合宿スケジュールをみたけどよ、ありゃ人間を人間としてあつかってねえな。」
陸上部A「選抜の第一戦でやぶれた汚名をはらそうってんだろ。」
陸上部B「いくら汚名をはらそうたって、ありゃいきすぎだよ。練習時間を増やすために睡眠時間をおおはばにけずっちまったんだからな…。」
陸上部A「なんせ、選抜校をふくめ三十六校を相手に一日三試合を消化して、それに全勝しようってのが目標ってんだからな。」
陸上部B「そりゃ、日本一になりたいのはわかるが、あまり目標が高すぎやしねえか。」

丸井が泣きながら立っている一年生の横を歩いている。

丸井「おめえら、メシを食わないのか。いつまでも、メソメソしてねえで、はやくかえっちまいな！」

丸井の言葉にもかかわらず一年生はそのままたちつくしていた。

丸井「かえれってんだよ！　やれやれ、一週間もたたないのに半分にへっちまうとは…。」

合宿中の練習は学年を問わず厳しく行われた。
「カキーン！　カキーン！」
一年生に対しての守備練習が始まった。

丸井「打つのやめろ！　ダメだダメだ。こいつらにこんなことやったって。おめえらグローブをすてちゃえ。」
一年生「なんにしてもたすかった～。」
丸井「バーカ。こわがらずにタマを手のまん中でとる練習をするんだ。」
一年生「……。」
丸井「はじめっ。」

グローブを捨てた一年生たちは素手で上級生がノックしたボールを取る練習を始めた。

丸井「ようし、つぎっ！」
近藤「あの～、わてらも素手でっか～。」
丸井「あたりまえだ。」

「カキーン！」
近藤の組も同じようにグラブを捨てて素手でボールを取る練習を開始したが、近藤はこわがって背中を向けてしまう。そこに丸井のケツバットがとんだ。

丸井「また、ケツをむけたらバットがとぶぞ！」
近藤「むぐぐ…。」
丸井「さ…つづけろ。」

丸井のケツバットの効果からか多少は前向きにボールを取るようにはなったが、それでも近藤はボールから逃げまわっていた。

丸井「あのやろう、まるでタマをとる気がねえんだな。」
イガラシ「キャプテン…、近藤ですがいっそピッチングの練習させたらどうですかね。」
丸井「あいつだけ特別あつかいしようってのか。」
イガラシ「あれじゃ、みんなに悪影響あたえるし…、まずいと思って…。」

近藤の班はみんな近藤を見習って気合いの入らない練習を続けていた。

丸井「それもそうだな。近藤！　おまえ向こうに行ってピッチングの練習でもやってろ。」
近藤「ほんまにいいんでっか。」
丸井「目ざわりなんだよ、てめえは。」
近藤「うおっ。」

二、三年生に対しては一年生よりも距離の短い特訓の位置でのノック練習が始まった。一年生のノックの距離もじょじょにではあるが日がたつにつれて短くなっていった。

そして合宿はつづけれられた。部員ひとりひとりが一所懸命どんなチームにも通用するように、そして真の日本一のチームになろうと。しかし真夏の日のてりつけるなかでのはげしい特訓が過酷（かこく）だったのか、特訓をはじめたとき八十六名いた部員も日がたつにつれ、つぎつぎ脱落していった。

そして十日目の夜…。

イガラシ「さあ、メシだぞ～っ。」
丸井「あーはらへった。きょうの当番はイガラシか…。」
イガラシ「ええ。」
丸井「うまそうなラーメンだぞ。さあみんなくえくえ。そういやイガラシの家はソバ屋だったな。」
イガラシ「え…ええ。」
丸井「どうだみんな、いくらインスタントラーメンでもイガラシが作るとちがうだろう。」
加藤「そういや、うまいな。」
高木「うん。」
丸井「なあイガラシ、これどうやって作ったかおしえろよ。」
イガラシ「そ…そのう…。まずあつい湯で三分間ゆでる。それで味つけスープをそのあとにいれるんです。それでもってえーと、ひき肉だの野菜なんかいためたのをいれて…するとたいへんおいしくいただけるわけ。」
丸井「コショウをいれろって書いてなかったか。」
イガラシ「あ…。」

丸井がナインをリラックスさせようと軽口をたたいた。ただそういった中でも夜食を口にしない部員がいた。

丸井「どうしてソバをくわん。ムリをするんじゃねえよ。きょうまでこの合宿についてくりゃじゅうぶんなんだからな。いま、荷物をまとめといてやるからな。それまで横になってろよ。」
近藤「じゃ、ワイがソバをくってやるさかい。」

「パシ！」

丸井が近藤の手をたたいた。

丸井「タマをにげまわるようなやつにはくう資格はねえんだ。」

丸井、加藤、島田が協力して荷物をまとめた。

丸井「じゃあ気をつけてかえれよ。」
加藤「大丈夫かな、送っていかなくて。」
丸井「人の心配よりおれたちはスケジュールをこなすことだけを考えてりゃいいんだ。さああすのためにねようぜ。」

のこった二十三人はおたがいにはげましあい、さらに過酷（かこく）な合宿生活がつづけられた。しかし、体力の限界をこえるはげしい練習に部員たちは口をきく者もいなくなっていった。そして部員のひとりひとりがこの苦しさをのりこえることが、真の日本一につながるんだと自分たちにいいきかせ、一日一日を練習にはげんだ。

3・5　練習試合の朝

かくして、すべての日程を終え、特訓の成果がためされる朝をむかえた。総勢八十六名いた部員たちはすでに十一名にへっていた。

イガラシ「とうとう、やりましたね。」
丸井「なんだ、起きてたのか。」
イガラシ「ぐっすり、ねられましたか？」
丸井「いや、緊張してたせいか何度も目がさめたよ。」
イガラシ「キャプテンもですか、じつはおれもなんです。」
丸井「そういや、みんなも緊張してたせいかゴソゴソねがえりをうってたな。さあ、みんな、おきろ！　おきろ！」

高木「お…おい、いい天気だぜ。」
島田「む…。」
丸井「さあみんな、顔をあらってメシにしようぜ。」

「はいっ。」

丸井がみんなに声をかけ手洗い場に向かおうとしたが一人近藤だけがまだ寝入っていた。

丸井「おい近藤、いいかげんおきろよ！」
小室「あいかわらずだな。」
丸井「メシができるまでねかしとくか。」

小室「しかし、なんだかんだいったけど、よくついてきましたよ。」
丸井「まったく、まっさきに脱落すると思ったがよ。なんせ一年で残ったのはやつひとりだったからな。」

丸井が近藤のまくらをけとばしたが、何も反応しない近藤を見てみんなは笑いながら手洗い場にいった。

3・6　三十六校との練習試合

三十六校との練習試合の初日を迎えた。初戦校となる選抜大会で準決勝まで進んだ川下中が墨谷二中に着いた。

イガラシ「キャプテン、きました。」

グラウンドでキャッチボールをしていたイガラシが真っ先に川下中に気がついた。

丸井「よろしく！」
木村「いや、こちらこそよろしく！」
丸井「着がえは部室をつかってもらいましょうか。だれか案内してやって。」
高木「はい。どうぞこちらです。」

高木の案内で川下中ナインは部室に向かって歩き始めた。

丸井「さすが選抜で準決勝まで進んだだけあって強そうだな。」

川下中の後ろ姿を見ながら丸井はその落ちついた態度に自信を感じた。その直後だった。試合開始十二時からの明星中ナインがグランドに顔を見せた。

明星A「やあ、丸井さん。」
丸井「あれ…明星さんとは十二時からじゃなかったですか？」

明星Ａ「ええ、それまでグラウンドをかりて練習させてもらおうかとおもいまして。」
丸井「弱ったなあ…。」
明星Ａ「なにか？」
丸井「じつは、九時からほかとやるんで…。」
明星Ａ「すごいですね、変則ダブルヘッダーってわけですね。」
丸井「いや…、変則トリプルヘッダー…、なんていわないか、ようするに三校とやることになっているんですよ。」

明星中ナインはやや戸惑った表情で丸井の話を聞いていた。

明星Ｂ「どうします、キャプテン。かえりましょうか？」
丸井「かえるったって、また昼でなおすんじゃ大変でしょうし、どうですそのあいだ観戦してたら…、あの木の下が涼しくていいですよ。じゃごゆっくり。」
明星Ｂ「なんだ、あれは…。観戦だとよ、バカにしやがって。」
明星Ａ「ままま、いちおう約束したんだし。」

川下中ナインは丸井から勧められた木の下に荷物を置いた。

明星Ｂ「もっと、相手をみて約束してもらいたいですね。」
明星Ａ「もう、いうな。」

その時だった。部室から出てきた川下中に明星中ナインが気がついた。

明星Ｃ「お…おい、川下中だぜ。」
明星Ｂ「あいつらバカか、どだい一日三試合なんてハードスケジュールだってえのに、第一試合が選抜で準決勝まで進んだ川下中だとよ。」
明星Ａ「こぼしたってはじまらない。それより川下中とは今度の大会でかならず顔をあわせるはずだ。みんな、よくみとけ。」

明星中のライバル校である川下中が来ているとあって明星中ナインは目の色を変えた。そこに丸井がやってきた。

丸井「すいません、だれか審判をやってくれませんかね。」
明星Ａ「よし、おれがいく。」
明星Ｂ「じゃ、おれは塁審をやろう。」

明星中キャプテンは川下中のエース小川の球質をまじかに見る絶好のチャンスだと思い、自ら球審を務めた。

「プレイボール！」

墨谷二中対川下中の試合が始まった。先行は墨谷、一番バッター加藤が左打席に入った。初球から加藤は積極的に打ちにでてピッチャーのグラブをはじく打球を打ち出塁した。二番バッター高木は送りバントをしたが俊足を生かして一塁セーフとなった。

「タイム！」

川下中キャプテン木村がタイムをとりマウンドに川下中内野陣が集まった。

木村「どうも選抜のときの墨谷とはちがうようだな。」
小川「うむ…。おまえら守備のほうたのむぞ、ちいとかきまわされそうだ。」
川下Ａ「は…はい。」

ノーアウト一塁二塁となり得点チャンスとなった。そして三番丸井、四番イガラシと連続ヒットが続いた。

球審を務める明星中のキャプテンは川下中のエース小川の球質よりも、墨谷二中の的確なバッティングと機動力に驚いた。

3・7　浦上中キャプテン

墨谷二中が川下中と対戦している時に、校門の前には今日の第三戦目に対戦する浦上中があらわれた。

浦上A「おい！　そこの縞(しま)パン、野球部の連中はどこだ？」
生徒A「し、縞パン…。し、失敬な。」
生徒B「あいてになるな、ほっとけ、ほっとけ。」
浦上A「きこえねえのか、なろーっ。」
生徒A「き…、きこえますけど、なにも縞パンだなんて。」
浦上A「おれたちはな墨谷の野球部のやろうらにドたまにきてんだよ！　遠くからわざわざ練習試合にきてやったってえのにでむかえるのが常識だろ！　ええっ。」
生徒A「ご…ごもっともで…。あ…あそこをぬけるとグランドです。はい。」
浦上A「くそ～っ、おれたち浦上中をなんだとおもってやがんだ！　なめやがって。」
生徒A「す…すいません。どうも…。」

浦上中ナインは野球部グラウンドに向けて歩き始めた。

生徒A「だけどなんだっておれたちがおこられなきゃなんねえんだ。」
生徒B「あったまくるな、もう！」
浦上A「なんか、いったか。」
生徒A「い…いえ、べつに…。」

浦上中キャプテンが野球部グラウンドにやってきた。

浦上A「どういうこったい、よそのチームと練習してるみてえだぜ…。なんてもてなしかただ。」

第二試合目の明星中部員が浦上中ナインに気づいた。

明星B「お…おい浦上中だぞ。」
明星C「浦上中…。きいたことある学校だな。」
明星B「あたりまえだよ、全国大会になんども顔をだしてるじゃないか。」
明星C「え…、あの浦上中かよ。」

浦上A「おめえらここでまってろ。」

浦上中キャプテンはナインを待たせて、グラウンドにいる野球部員らしき生徒に声をかけた。

浦上A「おい、丸井ってやろうはどいつだ？」
明星B「あの…ぼくら二試合目にやることになっている明星のものなんですが…。」
浦上A「なんでえ、その二試合目ってえのは…？」
明星B「やつら墨谷二中は、一日三試合やるそうなんです。はい。」
浦上A「すると、おれたちは三試合目ってえことかな。」
明星B「そうなりますね。」

観戦していた明星中部員から話を聞いた浦上中キャプテンは、ますます自分たちがコケにされたことに腹を立てた。その足で試合をおこなっているグランドに足を向けようとした時だった。

浦上B「キャ、キャプテンちょっとまって！　ちょっとみてごらんなさいよ。」
浦上A「選抜で準決勝まで進んだ川下中じゃねえか。」
浦上B「それよりスコアボードをみてごらんなさいよ。」
浦上A「ど…どういうこったい、3対0で川下がやられてるじゃねえか。」

この回のトップバッター高木は三遊間を抜けるかという当たりを打ったが、ショートがこれを好捕した。しかしファーストへは返球することができず、内野安打となった。
次の打者は丸井だった。強打すると見せかけて手堅くバントでランナーを進めた。

丸井「ちくしょう、もう半歩でセーフだったのになあ。おい、イガラシダメおしといこうじゃねえか。」
イガラシ「まかしといて！」
「タイム！」
たまらず川下中キャプテンでキャッチャーを務める木村がマウンドにかけよった。
木村「まずいのをむかえたな…。一塁があいているから歩かせるか。」
小川「しかし五番もゆだんができねえぞ。」
浦上中はこの様子を遠くから見つめていた。
浦上Ｂ「どうやら、川下のエース小川がそうとういためつけられているようですね。」
浦上Ａ「バカヤロ、人ごとじゃねえぞ…。」
浦上Ｂ「し…しかしこんなことだとわかってりゃ、全員レギュラーをつれてくればよかったみたいですね。」
浦上Ａ「いまからでもつれてくるんだ。」
浦上Ｂ「……。あのう、これからあんな遠いところへ…。」
浦上Ａ「バーロー、さっさとつれてこねえかい！」
浦上Ｂ「は…はい。」
木村「じゃあ、とりあえず歩かせるつもりでくさいところをついていこうぜ。」
小川「そうだな。」
「プレイボール」
イガラシは二球目のやや甘い真ん中よりにきたボールを見のがさず打ちにいった。
「カーン」
打球はジャストミートしてセカンドの左を抜けるかと思われたが、川下中セカンドがこのタマを横っ飛びし、ダイレクトで捕球した。セカンド高木が飛びだしていたためダブルプレーとなってこの回の攻撃を終えた。
「スリーアウトチェンジ！」
川下中のライトを守っていた和田が顔なじみの浦上中をみつけた。
浦上Ａ「あ。」
和田「なんでえ浦上中じゃねえか。ちったあからだをあっためといたらどうだい。ひどいめにあうぞ。」
浦上Ａ「は…はいっ。」

３・８　九回裏、川下中最後の攻撃

墨谷ナインはマウンドに全員集まった。
丸井「さあ、この回さえおさえれば勝てるんだぞ。いいかおれたちの目標である三十六校との練習試合の初戦をかざってやろうじゃねえか。ただし選抜で準決勝まで進んだ川下中がおいそれとは勝たしてくれねえだろう。最後の一球まで気をゆるめるんじゃねえぞ。」
「オウ！」
全員で丸井の話を聞き、かけ声を出してそれぞれの守備位置にちって行った。
丸井「たのむぞ、近藤！」
近藤「はいな。」
近藤が投球練習を開始した。

和田「回をおうごとにタマが速くなるみたいだな。この回も塁にでなけりゃ完全試合だぜ…。」
浦上C「選抜のときより一段と球威がありますね！」
浦上A「だまってみてられねえのかっ。」

この回の先頭打者和田は一球目、二球目と空振りした。
「タイム！」
たまらず、川下中キャプテン木村はタイムをとった。
木村「よくばるんじゃねえ、やつのタマを打ちかえそうたってむりなんだ。バットをみじかくもってあてるだけに専念しろ！」
和田「は…はい。」
近藤「おやおや、バットをあんなにみじかくもっちゃって。さあ、これがとどめやーっ。」

近藤は三振をねらって三球目を投げた。
「ガキ！」
にぶい音を出して打球はピッチャーの近藤の前にころがった。近藤が前進してきてこの打球をとろうとしたが、打球には変な回転がかかっていてとろうとした近藤のミットをはじいた。イガラシがすばやくバックアップして一塁に投げた。
「セーフ」
きわどいタイミングだったが内野安打となった。
「やった〜。」
小川「ひゃーっ、完全試合はまぬがれたぜ…。」
木村「やれやれ、ノーアウトでランナーがでたぞ。ねがってもないチャンスだ。いいかなんとしてもこのランナーをホームにむかえるんだ。」
近藤「すんまへん…。」
イガラシ「今の打球じゃしょうがないよ。」
丸井「それより、ランナーは足がありそうだから気をつけろ。」
近藤「はい。」
丸井「とはいうものの、大丈夫かなあ。あのやろうセットポジションおぼえたばかりだからなあ。」

川下中の次のバッターは初球をバントした。
近藤「またまた、そうたびたびエラーはせえへんで。」

近藤はこのタマをすばやく処理したが、まにあわないセカンドに投げてしまった。
「セーフ！」
「やった〜っ。」
木村「ようし、なんとしてもランナーを二塁三塁におくるんだ。」

「タイム！」
丸井がタイムをとった。
丸井「どこへいくんだ近藤？」
近藤「だってキャプテンすぐけっとばすやんか。」
丸井「け…、けっとばさないからこい！　なあ近藤、おまえセカンドに投げてまにあうと思ったのか？」
近藤「い…いえむちゅうやったもんで…。」
丸井「バーローよくみて投げろ。」

セカンドにかえろうとした丸井だったが何かに気がついたようにイガラシを呼び止めた。

丸井「ようイガラシ。」
イガラシ「はあ。」
丸井「ランナーを塁にだすと近藤はまるっきりダメだ。あいてがあいてだしこのさいおまえが投げたほうがいいんじゃねえか。」
イガラシ「おれ、このあとの試合に投げなくちゃなんねえし、もうちょっとようすをみたらどうですかね。」
丸井「そうかなあ、なんかまかせきれねえからな、近藤は。」

ノーアウトランナー一塁二塁で川下中は次の打者もバントをした。

近藤「おっと、まったくバントばかりやんか！」

近藤はサードイガラシの指示でボールを一塁に投げた。

「アウト！」

丸井「ドンマイ、ドンマイそれでいいんだ。」

ワンアウト二塁三塁となった。

近藤「さあ、あとふたりで完封や。へへ…スクイズするかもしれへんからセットポジションね！」

川下中は初球をスクイズバントした。近藤はこのタマに飛びつき、キャッチャーに投げたがこのボールがとんでもない悪送球となってしまった。キャッチャー小室がボールをおいかけ、サードイガラシがホームをカバーした。川下中セカンドランナーがホームに突っ込んだ。

「セーフ」
「タイム！」
再びキャプテン丸井がタイムをとった。

丸井「ま…またやってくれたな近藤！」
イガラシ「よしなさいよ、キャプテン。」
丸井「なにもしやしないよ。まにあわねえのになんだってホームに投げたんだよ。さっきいったろ。」
近藤「す…すんまへん。完封したかったもんやから、つい…。」
丸井「バカヤロウ、てめえひとりで野球やってんじゃねえ！」
近藤「あいてーっ。」
丸井「だからイガラシおめえが投げろっていったんだ。」
イガラシ「ちょっとまってください。そんなことをしたら残り三十五校とのスケジュールがメチャメチャになってしまいますよ。」
丸井「なにいってやがんだ、全勝するって目標が初戦でつまずいたらもともこもなくなっちまうじゃあねえか。」
イガラシ「ええ、たしかに全勝するのも大切です。しかしもっと大切なことは全国大会で優勝することじゃないんですか？　そのためにも、近藤にこういう経験をさせとく必要があるんじゃないですか。」
丸井「おめえが、キャプテンかよ。」
イガラシ「いえ…、おれなりの意見をいったまでです。」
丸井「じゃあ、おれはキャプテンとしてはじめにきめた三十六校を全勝したうえで、全国大会に優勝させるつもりだ。」
イガラシ「そりゃ、川下に勝つことはむずかしいことじゃないですよ。しかしおれたちの相手は川下だけじゃないんですよ。」
丸井「おれは初志をまげるつもりはない。」
イガラシ「じゃ、おさえましょ。」
丸井「さあ、おめえはライトだ。」
イガラシ「やれやれ…。」

マウンドでのやりとりが川下中ベンチにも伝わった。

川下B「きいたか、おい。おさえましょうだとよ！　なめやがってこのう。」

小川「選抜は初戦でやぶれたてえのによくいうぜ。」

木村「よせよせ、こんな試合やってちゃなめられたってしかたがないぞ。むこうはスケジュールにしたがって試合をしてたってえのに、こっちは全力でぶつかってこのありさまだ。これいじょうみじめなおもいをしたくなけりゃ勝つしか方法はないんだよ。」

川下B「よ…ようし、やってやろうじゃねえか。」

小川「そうよ、なめられてたまるかってんだ！」

川下B「たのむぞ、斎藤。ランナー二塁で一打同点だ。」

斎藤「まかしとけって。」

イガラシは二塁に牽制球を投げた。二塁ランナーはあわてて塁に戻った。

イガラシは一球目、二球目をコーナーをついた速球でストライクをとった。そして三球目はカーブを投げた。バッターはタイミングがあわず空振りした。

「ストライク、バッターアウト！」

斎藤「おい、てごわいぞ。」

小川「む。」

木村「タイム！　川崎おまえあいう変化球に強かったな。」

川崎「え…ええ。」

木村「よし、おまえいけっ。」

川下B「ちょ…、ちょっとまってくださいキャプテン。もし逆転できずに延長になったらどうするんですか？　やつしか墨谷に通用するピッチャーはいないんですよ。」

木村「ねぼけたことをいうんじゃねえ。延長にはいって勝てるあいてだとおもってんのか！　それともおまえらがあのリリーフを打てるというなら話はべつだが。いいかランナーが二塁にいるいましか勝つチャンスはないんだよ。さあ、いけっ。」

川崎「は…はいっ。」

川下中のピンチヒッター川崎は初球から積極的に打っていった。初球はバックネットにあたるファールとなった。イガラシは二球目を投じた。

「カキーン」

打球はライトフェンスにあたった。近藤がこのボールを追いかけた。フェンスにあたったボールをとった。セカンドランナーはサードベースをまわった。

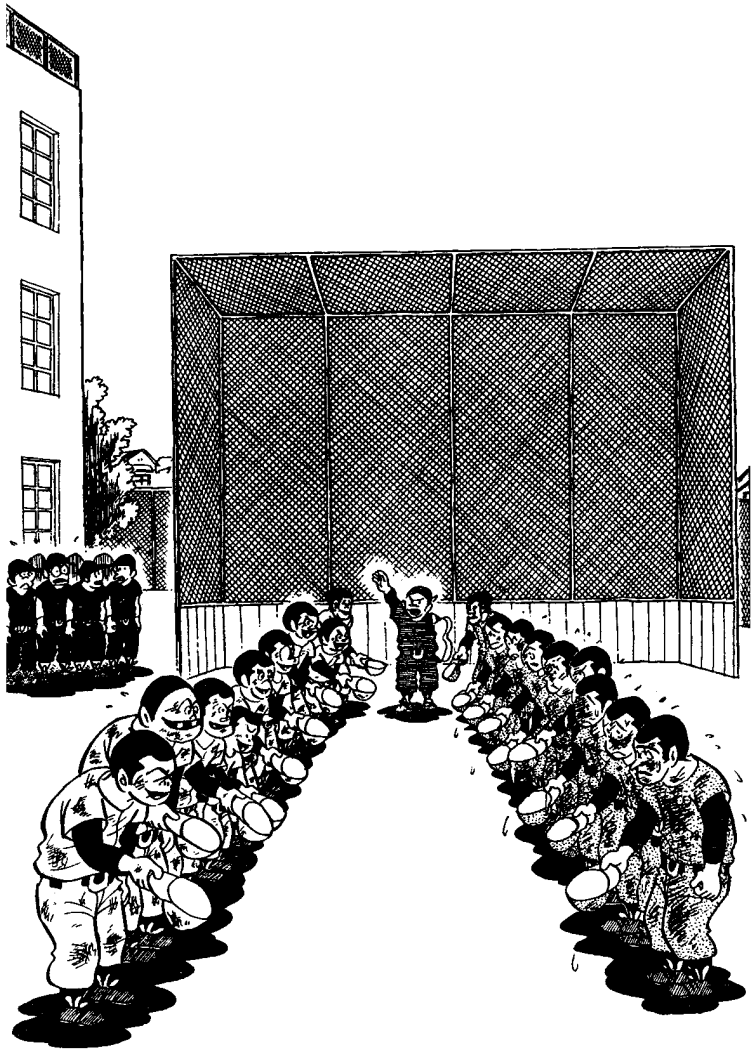
「近藤～、バックホームだぁ～」

遠く内野陣の声をききながら近藤はホームベースに向かって全力で投げた。近藤のタマがキャッチャー小室のミットにダイレクトでおさまり、小室がタッチした。ホームベース上でのクロスプレーとなった。

「アウト！」

近藤「やった～、ワイのタマでアウトにできた。」

近藤は初めてチームの勝利に貢献できたうれしさから、今ボールを投じた自分の右手を見つめてつぶやいた。

苦しみながらも3対2で選抜大会ベスト4の川下中に墨谷二中は勝利した。

想像を絶する合宿による特訓にたえぬいたナインは、総数三十六校という強行なスケジュールにもかかわらず、川下中の勝利をかわきりに全勝という偉業（いぎょう）をなしとげた。そして地区予選大会をむかえるのであった。